

世界名詩集（全26巻）18 ジャム 桜草の喪／クロードル 三声のカンタータ

定価 六〇〇円

昭和四十四年七月二十日 初版発行

訳者 手塚伸一 中村真一郎

発行者 下中邦彦 東京都千代田区四番町四番地

発行所 株式会社平凡社 東京都千代田区四番町四番地

郵便番号 120
振替東京 29639

印刷 東洋印刷株式会社

製本 株式会社石津製本所

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

世界名詩集 18

ジャム

Francis Jammes

桜草の喪

LE DEUIL DES PRIMEVÈRES

クロードル

Paul Louis Charles Marie Claudel

三声のカンタータ

LA CANTATE A TROIS VOIX

平凡社

装
幀
原

弘

桜草の喪

フランシス・ジャム

序	5
悲歌	
第一の悲歌	6
第二の悲歌	10
第三の悲歌	27
第四の悲歌	29
第五の悲歌	34
第六の悲歌	35
第七の悲歌	41
第八の悲歌	43
第九の悲歌	49
第十の悲歌	51
第十一の悲歌	57
第十二の悲歌	62
第十三の悲歌	67
第十四の悲歌	70
第十五の悲歌	72
第十六の悲歌	75
第十七の悲歌	80

さまざまな詩	
ヴァラン夫人	83
グアダル・ペ・デ・アルカラス	86
ぼくは見た、去年のものが……	89
彼らはぼくに言った……	90
アムステルダム	92
ブリュージュ	97
十四の祈り	
一 他人が幸福であるための祈り	99
二 星を求めるための祈り	101
三 子供が死なぬための祈り	103
四 森のなかで信仰を得るための祈り	104
五 素直であるための祈り	106
六 苦痛を愛するための祈り	108
七 ぼくの死ぬ日が美しくきよらかであるための祈り	109
八 ロバと一緒に天国に行くための祈り	112
九 神をたたえるための祈り	114

十 思いにふけるための祈り	116
十一 素直な妻を得るための祈り	118
十二 神に素直な言葉を捧げるための祈り	119
十三 無知を告白するための祈り	122
十四 最後ののぞみのための祈り	124

序

この作品集は、わたしの詩作品中「明の鐘から夕の鐘まで」の次に出るものだが、これにつづいてごく最近の詩が「詩集」と題して発表される予定であり、その方がわたしの一層の成長を示すものとなるう。

こんなことを申しあげるのは、「桜草の喪」において、わたしが譲歩したと信ずる批評家諸氏がいるかもしれないからである。そうではない。わたしの形式は、時にはげしい、時におだやかなわたしの感覚に従っている。批評家諸氏の気に入ろうなどとは、毛頭わたしの気にかけないところである。

「桜草の喪」は、おだやかな形式、おだやかな想いの作品である。なぜなら、わたしの苦悩が鎮まることもあった孤独のなかでこれは書かれたからである。

フランス・ジャム

悲歌

第一の悲歌

アルベール・サマン^Iに

いとしいサマン、ぼくはふたたび君にむかつて書く。

はじめてぼくは死者にむかつて詩をおくる。

君はこれを明日、空の上で

永遠の村の年老いた従者から受けとるだろう。

ほほえんでくれたまえ、ぼくが泣かないように。

言ってくれたまえ、「ぼくの病気は君が心配するほど重くない」と。

ぼくの家ドアをまた開けてくれないか、そして敷居をまたぎながら

言ってくれないか、「なぜ君は喪服を着ているんだ？」と。

また訪ねてきてくれないか。君がいるのはオルテーズ²だ。

幸福がここにはある。君の帽子をその椅子の上に置くといい。
のどがかわいていないかい？ 青い井戸の水とブドウ酒がある。
ぼくの母も二階から降りてきて言うだろう、「サマン……」と。
ぼくの牝犬もその鼻づらを君の手にこすりつけるだろう。

ぼくはしゃべる、君はほほえみながらまじめに聞く。
時間なぞ存在しない。君はぼくが話すにまかせる。
夕方がくる。秋に似た日暮れどきの

黄色い光のなかを、ふたりは歩く。

溪流にそって進もう。鳩がしゃがれた声で

深緑のポプラの木にさびしく鳴いている。

ぼくだけが語る。君はまたほほえむ。

幸福がだまる。夏の終わりの、うすぐらい道がある。

ぼくたちはまずしい敷石をふんで家へと戻ろう。

煙が青くのぼっている暗い戸口をかざる

おしろいばなのかたわらに、ひざまずく木かげがある。

君の死はなにも変えなかった。君が愛した木かげ、そこで

君が生き、君が悩み、君がうたった木かげを

二人してはもう見ることができないが、君はそれを心に守っているのだ。

君の光は、夏のうつくしい夕べ、

おもわずぼくたちをひざまずかせるこの暗闇から生まれた。

通りすぎながら表を育て給う神の香りをそこに感じて

くろい昼顔の下で、番犬が吠えている。

ぼくは君の死を嘆くまい。ほかの人たちは

君の額のしわにふさわしい月桂樹の冠を置くだろう。

君をよく知っているぼくは、その冠がかえって君を傷つけることをおそれる。

君の豎琴の調べに泣きながら、君の柩について行く

十六歳の少年たちにむかって、頭に冠をいただかずに

死んでいく人たちの光栄をかくしてはならない。

ぼくは君の死を嘆くまい。君の生命はそこにある。

リラをゆする風の声がけっして死なずに、

数年ののち、しおれたとおもっていたそのリラのなかに

また帰ってくるように、いとしいサマンよ、

君のうたは、ぼくたちの思想をいだいて成長した
少年たちをゆすりに、かならず帰ってくるのだ。

草のない岡の上を、泣きさわぐ羊の群れとともに行く

古風な牧人のように、ぼくは

むなしく、君の墓に供えるものを探しもとめるだろう。

塩を供えれば、谷間の小羊に喰べられてしまうだろう。

ブドウ酒を供えれば、君を剽窃ひょうせつした人たちに飲まれてしまうだろう。

ぼくは君を思う。田舎のこの古びた客間に

君を迎えたあの日のように、今日も暮れてゆく。

ぼくは君を思う。ぼくは故郷の山々を思う。

ぼくは君に連れていってもらったヴェルサーユを思う。

ぼくたちは歩きながら、悲しい思いで詩を口ずさんだものだ。

ぼくは君の友を思う。ぼくは君のお母さんを思う。

ぼくは、青い湖のほとりで、死を待ちながら、

その首の鈴の音に合わせてめえめえなっていた羊を思う。

ぼくは君を思う。ぼくは大空の清らかなむなしさを思う。

ぼくは限らない水を、火の明るさと思う。

ぼくはブドウの葉に輝く露を思う。

ぼくは君を思う。ぼくはぼくを思う。ぼくは神を思う。

第二の悲歌

花は今ふたたびぼくのために太陽にかがやく。

ぼくの心は暗い国から出てきたようだ。

木の下に行けば慰めが見つかるだろうか？

ぼくのパイプは若いころのようにけむっている。

ぼくのパイプは雨の音のなかにけむっている。

そしてぼくは昔の春の日を想っている。

メリサの花よりあまくいといい思い出が

少女らのいっぱい遊ぶ庭にも似た

陽気な、だが悲しいぼくの心に住んでいる。

ぼくはぼくの想いを少女たちにたとえるのが好きだ。

ぼくの想いにも少女たちのおずおずした脚のまるみがあり、
笑い声のなかのあざけるような心の高ぶりがある。

少女だけがぼくを退屈させなかった。

君たちは知っているだろう、なにかを小声で話しながら
野ばらの垣のふるえる花の雨にそって行く少女たちを。

だがぼくは、ぼくの想いが思っていることを知らない。

ぼくは夏休みのあるしずかな日に生まれてきたのだろう。

木いちごが従妹の白い花をつけていたところだった。

ぼくは知らない、なぜぼくが人生を過よってきたかを、

なぜ今日、この大きな悲しみのあとで

雨にかくれた恋の夕べをまた思うかを。

ぼくの幼い日は、あそこの小さな花壇のなかにある。

ぼくの青春は灰色とみどりの秋の恋だった。

そしてこれからの人生は墓地のもちの木のようなものだろう。

神さまがぼくを死なせなかったのは、きっと

お前のことを思いだしてくださったからだ。ぼくを待ちながら
あのかわいいカナリヤの世話をするやさしいお前のことを。

II

おお、おいで……（昔の詩人の言った言葉だが）

おお、おいで……お前の小さな心がぼくを支えてくれるのだから。

この暗い村にすれば、うなずくお前の頭のようにゆれる

若々しい花をつけた年老いたリラの木がある。

もしお前が、かしの木の上にふるえる青いもやに沈む

夕日を見なかったとしても、お前は感ずるだろう、

その太陽がくちびるの上で燃えあがるのを。

もしお前が、夜をふちどり沼のほとりのよろいぐさに火をとす
あまいあけぼのを見なかったとしても、

ぼくはあけぼののようにながい接吻で

お前の目をつぶらせて、それをおしえてあげよう。

そのときお前の心は起きあがる白い一日でいっぱいになるだろう、
なぜって、ぼくがお前のくちびるにあけぼのを置くのだから。

そして、ゼナイド・フルリオが愛と名づけた³

このすばらしい気持ち、お前にわからなかったとしても、

ぼくはそれをゆっくり説明してあげよう、ゆっくりと。

お前がそのまろい膝をぼくに押しつけ

くちびるをくちびるによりそわせたくなるほどに。

そのときこそ、話はしているが人がいつもかくしている

愛という気持ち、がどんなものかお前にもわかるだろう。

なぜぼくはこんなに若いのか、なぜぼくの新鮮な心は
はしばみの木のように夕べになるとふるえてくるのか？

ぼくは無茶な男だ。ぼくは青い芝草の上でお前が欲しい、七時ごろ。そのとき空たかい月は

太陽の名残りをまだその角に宿す茶色の牝牛の額の上に、濡れた光を雨と降らせるだろう。

とてもとても小さいころからぼくが知っていたお前よ、

ぼくには夢を作りなおすことができるのだろうか？

子供のころのように、ぼくはぼたんかずらの実でやさしくお前をぶちたい。

ぼくは百合の夢のようなお前の胸の香りを吸いこみたい。

そしてお前の顔に雨と降るぼくの接吻をかわして

お前が朗らかに声高く笑うのを聞きたいのだ。

ぼくをこわがらないで。ぼくたちは古い詩を読もう。

そしてさまざまな夢想到にさそわれて、

くらい音楽のようにひびく言葉に耳をかたむけよう。

いつもやさしくほほえんでいた死んだ女中が、

まだ坐っているようなくらい台所の日の光のなかに

夕べは、はやくもしのびよってくるだろう。

花は朝日にあたってはじけた。

犬は吠え、藤棚の上のよろい戸は

ねむっている木の葉を押しつけて開かれる。

お前は、目にしみるほどになめらかな腕のしびれをなおすだろう。

ぼくたちの疲れた目には、澄んだ水のような青空の下

この野原にうずまき、愛の姿しか見えないだろう。

急にぼくがだまりこんでしまうのでお前は不安になる……

聞かないで。ぼくはなにもしゃべりたくない。

なぜぼくがほかの人たちのことばかり話したかを知りたがってはいけない、

ぼくが今愛しているのはお前だけだから。ほら

北の国からきたつぐみが赤い秋をついばむ音が聞こえるではないか。

それに、秋の風はオリブのようににがいではないか。

そんなに知リたがってはいけない、

もしお前がぼくを愛しているなら

お前のあまい沈黙でぼくのにがい心を満たしてくれないか。